



春の噂



陸奥

春の噂

春眠は暁を覚えずという。例に違わず、僕もひたすら眠かった。また、春は出逢いの季節とも別れの季節ともいう。しかしたかだか十四年間しか生きていない僕にとって、それは本当のことなのかどうか確かめようのないことであるので、ただ惰眠を貪るのに終始している季節だった。外ではウグイスが気持ちよく鳴いている。放課後の誰もいない教室の窓際の席で、僕は一人仮眠をとっていた。今日の授業は僕の苦手な数学や理科だったので脳が疲れている。そのクールダウンをかねてだ。また、僕は家に帰っても何もすることがない帰宅部だ。暇をもてあましてるので、こうして学校で時間をつぶしている。もう少し有意義な時間のつぶし方をすればいいと思うかもしれないが、僕は不精なのでそういうことはしない。

「おい」

教室の入り口付近から低い男の声が聞こえた。僕は耳だけを傾げる。誰の声なのかは見当がついた。だからこそ僕は寝ているふりをしているのだ。

「おい」

声の主は教室の中に入ってきた。僕は依然として机につぶしている。心臓が高鳴っていた。僕の快適な睡眠を妨害する不届き者の正体はおそらく……。

「おい、起きているんだろう」

耳元で声が出た。低いドスの効いた声だ。僕は思わず身震いした。もう誤魔化しきれない。僕は顔をあげ、よだれをふいた。

目の前には僕のよく知る人物がポケットに手をつっこんで立っていた。知っているのは僕だけじゃない。おそらく校内の誰もがその存在を知っている人物。内館くん。春夏秋冬、ほぼ毎日平和で問題が起こらないこの学校で、唯一凶暴でおなじみ。授業は平気でさぼるし、教師には悪態をつく。外でかつあげをして、他校の生徒とけんかに明け暮れているという噂もある。誰もが彼のことを恐れ、腫れものを触るかのような扱いをする。そんな内館くんがなぜ僕のような人間をぎろりと睨んでいるのだろう。僕にはまったく分からなかった。

「佐藤健太だな」

内館くんはその切れ長の目をより一層細めて、僕に言った。

「はい」

僕は素直に答えた。

「ちょっと顔貸せや」

顔を貸す。そんな台詞を生まれて初めて耳にした。僕は少しおかしくなって笑いそうになったけど、必死にこらえた。人は恐怖の中にいると不思議とおかしな気分になるらしい。僕が黙っていると、内館くんは語気を荒げて聞いてきた。

「おい！聞いてんのか！」

「は、はい！」

僕は反射的に返事をしてしまう。我ながら情けない声をあげてしまった。

「なら、ついてこいや」

「はい」

従順に従う。

廊下を二人で歩いていた。校舎のどこかからトロンボーンの声や、クラリネットの音が聞こえてくる。グラウンドからは野球部員の掛け声が聞こえてくる。やはりこの学校は平和そのものだ。しかし、それに比して今の僕が直面している状況は穏やかではない。一体どうしたことだろう。僕はなにも彼に危害を加えるような真似はしていない。ただこっそり彼の悪口に便乗したことならある。それでもそんなことはクラスの誰もがしていることだ。僕だけが特別なわけではない。もしかして僕が悪口を言っていることが彼にばれた？そんなことってある

だろうか。そう簡単に些細な情報が伝聞することってあるだろうか。僕は大きな疑問と恐怖を抱えたまま、ただ内館くんの後ろをついていった。

屋上に到着した。実のところ屋上にははじめて来た。僕は平穩無事をモットーとする人間なので、ヤンキーとかヤニとかいった存在と関わりの深そうな場所に訪れるのは避けていたのだ。まして、屋上において女子から告白なるものをされるという機会に恵まれるということもなく、僕の平凡なモテない中学ライフは早や三年目を迎えようとしていた。

内館くんが僕の方に振り向いて、仁王立ちになった。威圧感が二倍になった。

「お前に聞きたいことがある」

「は、はい」

屋上には穏やかな春の風が吹いていた。その風が彼の長めの髪を揺らしていた。

「五十嵐薫と付き合っているというのは本当か？」

内館くんの放った言葉を聞いて僕は自分の耳を疑った。五十嵐薫と付き合っているだって？そんなことあるはずがない。五十嵐薫というのは学校一の美人でマドンナ的存在だ。そんな彼女と僕のようなスクールカーストにおいて底辺の人間が付き合えるわけがない。

「つ、付き合っていない」

「本当か？」

「断じて」

内館くんは眉根を寄せて僕を見る。

「怪しいな」

「全然怪しくないですよ。だいたい僕みたいな人間が五十嵐さんと付き合うっておかしくないですか？ありえないですか？」

「まあな。でもお前と五十嵐が付き合っているという噂が校内に轟いているんだよ。火のないところに煙は立たないっていうだろ」

「そんなこと言ったって、本当に付き合っていないんですって」

僕は必死に弁明した。しかし、内館くんは今ひとつ納得がいかない様子だった。

「そこまで言うなら証拠を見せろ」

無理難題を要求された。証拠ってなんだ。僕と五十嵐薫が付き合っていないという証拠か。そんなもの提示のしようがない。それともあれか。僕のパソコンの中にある秘密のフォルダの中身を見せれば、僕がいかに異性と縁遠い生活を送っているかということが証明できるだろうか。しかし、今手元にそれはない。

だいたいなんだ。その噂。どこのどいつがそんな噂流しているんだ。

僕は困り顔で内館くんに訴えかけた。

「なら、本人に尋ねてみればいいじゃないですか」

僕の言葉を聞くと、内館くんは「ふんっ」と鼻を鳴らして言った。

「お前、知らないのか？五十嵐は数日前から学校を休んでいるんだよ」

「ど、どうして？」

「さあな。だから俺は直接お前に聞いてるんだよ」

全く知らなかった。五十嵐薫が学校を休んでいるなんて。

内館くんは僕の顔に自分の顔を至近距離まで近付けた。かすかにたばこの匂いがした。

「証拠が見せられないなら、本気でぼこるぞ」

内館くんは恐ろしいセリフを口にした。一気に血の気が引いた。

「しよ、証拠って言ったって……」

僕は困り果てて黙りこくってしまった。僕が恐れおののいている様子を見て愉快だったのか、内館くんは口角

を上げて笑った。

「わかった。明日まで待ってやるよ。明日までに証拠をもってこい」

「明日ですか……」

「ああ。明日までに証拠を持って来たら許してやる。しかしもしも持って来れなかった時は……分かってるだろうな？」

「は、はい！」

僕は恐怖のあまり素っ頓狂な声をあげてしまった。

内館くんはうっすらと微笑むと「じゃあ、また明日な」と言って屋上を去って行った。僕は微かに「はは」と笑うと、誰もいない屋上で一人途方に暮れた。

どうしよう。明日までに証拠とやらを持っていかなければ血祭りにあげられる。学校一の狂犬に。これは緊急事態だ。どうする？しかし、気が動転していて、思考がうまくまとまらなかった。こういうときは……そうだ。友達に相談しよう。それはいいとして誰に？僕は必死で考えた。こういうとき力になってくれそうなやつ。それでいて校内に残っている人間が望ましい。一刻も早く今あったことを打ち明けたい衝動に駆られていた。

あいつだ。あいつなら、きっと僕の話真剣に聞いてくれるだろう。

僕は目的の人物に会うため、屋上をあとにした。

我が中学は伝統的に部活動が盛んだ。数多くの体育会系、文化系の部活動が存在し、同好会まである。しかし、そんな中でも我が友人が所属する新聞部は廃部の危機に瀕していた。この春めでたく部員が一名になり、いよいよ存亡が危ぶまれる新聞部。

その新聞部の部室の前に僕は立っていた。ドアをノックすると部屋の中から「うーい」というなんとも気だるそうな返事が返ってきた。

ドアを開けると、机の上でなにやら書き物をしている人物が僕の顔を眠たげな眼で見上げてきた。

「よお、何やってるんだ？」

「よお、佐藤。何って記事書いてんだよ」

目の前にいるこいつは鈴木浩太。弱小新聞部の最後のエースにして僕の友人だ。中学三年生の平均よりも背は低く、童顔。それが本人のコンプレックスになっていることを僕は知っている。毎日せっせと牛乳を飲んでいることも。以前、牛乳は本当に身長を伸ばすことに繋がるのかという疑問を呈したら、

「効くに決まってるだろ！」

と、顔を真っ赤にして抗議してきたことを覚えている。

そんな鈴木だが僕と違って決して女子にモテないわけではない。むしろ一部の女子には絶大な人気があるそうで、僕は鈴木のことを密かに恨めしく思っていたのだ。

「なんだよ、佐藤。入部希望？」

鈴木が目をらんらんとさせ、聞いてきた。期待されている。

「いや、ごめん。違うんだ」

僕の言葉を聞いて、鈴木はあからさまに落胆した。

「たのむよお。佐藤。入ってくれよお」

懇願されてしまった。しかし中学三年間帰宅部に徹した僕がいまさら部活動というわけにもいかないだろう。

「じゃあ、なんの用なんだよ。こう見えても俺、暇じゃないんだけど」

「実はちょっと事件があつて」

「なに！事件？聞かせろ」

鈴木は事件という言葉に弱い。新聞部員の性だろうか。ジャーナリスト精神に溢れているやつなのだ。こいつのこういったところを知っているから、僕はここに来たのである。

「実はさっき内館くんに脅された」

鈴木は目を丸くさせると、しばらくして腕を組んでなにやら考えて僕に言った。

「なるほど。あの噂のせいかな。五十嵐薫がお前と付き合っているという」

「ビンゴ」

「ははあ。内館くんも五十嵐薫の熱烈なファンだということは俺の耳にも届いているよ。なるほどねえ。それで、五十嵐薫と付き合っているのかって脅されたんだろ」

こいつは相変わらず鋭い。こういったところも頼りになるところだ。

「それで、明日までに付き合っていないという証拠をもってこいと言われた」

「はは。お前も難儀な男だねえ」

鈴木は朗らかに笑った。こいつが笑ってくれたおかげでなんだか気持ちが軽くなった。さっきまで僕は緊張しっぱなしだったのだ。僕は鈴木に言った。

「どうにも困ってるんだ。助けてくれ」

「いいよ。でも報酬は？」

友達に報酬を要求するのか。しかたがない。

「日出屋のラーメン一杯」

「だめ。弱い」

「半チャーハンつき。餃子もつける」

「まだ弱いなあ。というか佐藤、お前鈍感だなあ」

「なに？」

「我が新聞部に入部しろ。佐藤。それなら助けてやる」

痛いところを突かれた。しかし、やむをえないか。

「部活動は夏くらいまでだよな」

「一応、普通の部活はそうだが。我が新聞部は伝統的に三年生も一年めいっぱい活動する。それに今年は新入部員を獲得しなければいけないし。忙しいぞ」

「うえ……」

「さあ、どうする？佐藤。お前の運命の分かれ道だ」

とてつもなく面倒なことと思われた。しかし、ここはしかたない。あの内館くんの華麗な右ストレートにノックダウンされるのならば、まだ新聞部に入ったほうがまだ。

「わかったよ。入部する」

「よし！」

鈴木は思い切りガッツポーズをした。心底うれしそうだが、しかし、僕の心は暗かった。内館くんに脅されたあげく、新聞部に入部するはめになってしまった。今日は厄日だ。

「そうと決まれば。捜査開始だな」

鈴木が意気揚々と言った。

「捜査って、なにから始めるんだ？」

「まずは噂の出所を探そう」

「で？どうするの？」

「こういうのは頭で考えていてもしかたがない。とにかく足をつかって情報を得るんだ」

そう言うと佐藤はメモを片手に、部室を出て行った。僕も後に続く。

廊下に出た。二人で歩く。僕は鈴木に尋ねた。

「どこへ行くんだ？」

「俺の友達のところ。女子なんだけど、こういうのに詳しいからさ。かくいう俺もあの噂はそいつから聞いた

んだ。そいつに聞けばなにか分かるかもしれない」

渡り廊下を渡って、教室のある方へと足を向ける。次第にトロンボーンの声が強く響いてきた。その音の発信源であろう教室の前に僕たちはたどり着いた。

鈴木が教室のドアを開けた。

そこにはトロンボーンの実習をしている女子の姿があった。ショートカットで、背は鈴木と同じくらい。なんとなく利発そうな印象を受けた。僕は彼女の名前を知らなかった。

「よお。中田、精が出るねえ」

「鈴木くん。邪魔しに来たの？」

「いやいや」

二人は笑い合った。中田さんという女子のあいだで他愛のないやりとりがおこなわれる。僕は女子とほとんど話すことがないので、こういったやりとりを自然に行える鈴木を尊敬する。それと同時に軽い自己嫌悪を覚えた。

トロンボーンを机の上において、中田さんは僕たちに近づいてきた。僕は自然と緊張する。

「中田。こいつ佐藤。佐藤、こいつ中田」

あっさり僕を紹介すると、鈴木はさっそく本題に入った。

「練習中すまんね、中田」

「ううん。別にいいけど。何か用？」

「うん。実はさ。あの噂あったじゃん。五十嵐薫が付き合ってるってやつ」

「ああ。うん。……あ、もしかして。あの佐藤くん？」

「そうそう。噂の当事者の佐藤ってこいつなのよ」

「へー。で、本当に付き合っているの？」

中田さんが僕の顔を覗き込んできた。顔が熱くなった。僕はかぶりを振った。

「やっぱりね。怪しいと思った。うちの弓道部ってすごく厳しいじゃん」

「はあ。そうなんですか」

「そうだよ。なんといまどき恋愛禁止なんていう掟もあるんだから。それ破ったら最悪退部らしいよー」

いまどき恋愛禁止？すごく時代遅れな掟だな、と僕は少し驚いた。

「それでさあ。俺たちその噂の出所を探してるんだけど、何か心当たりない？」

鈴木が中田さんに訊いた。

「それなら簡単。三年一組の大倉さんだよ。彼女学年一の噂好きだからねえ。私も彼女が吹聴しているのを見かけたよ」

「なるほど、大倉か。あいつたしか文芸部だったよな。ということはまだ校舎に残ってる可能性が高い」

「うん。残ってると思う」

「ありがとう中田」

そう言うと鈴木は教室を出て行った。僕も中田さんにペこりとおじぎをすると、鈴木の後に続いた。

廊下を二人で歩く。今度は文芸部か。鈴木が僕に話しかけてきた。

「しかし恋愛禁止なんて時代錯誤もいいところだよなあ。いまどき、小学生でもセックスしているぜ」

昨今の子供の性事情ならば僕も知っている。だいぶ経験する年齢が下がってきているということだ。しかし、僕はそんなやりまくりの人間とは一線を画す。女子とまともに話すらできない人間が性行為など、夢のまた夢。

「佐藤、お前って童貞？」

鈴木が突然訊いてきた。僕は慌ててしまう。

「あ、当たり前だろ」

「ふーん」

「お前はどうかんだよ」

「俺は二か月前に捨てた」

僕はその言葉を聞いて哑然とした。僕とそう変わらないと思っていた友人が、すでに大人の階段を上っていたなんて。僕の好奇心はむくむくと膨れ上がった。

「誰とやったんだよ」

「それは秘密」

鈴木は人差し指を口に当てて「しー」のポーズをした。僕の好奇心は俄然高まったが、それ以上聞くのは自重することにした。

そうこうしているうちに文芸部の部室に到着した。部屋の中からは数人の女子のにぎやかな笑い声が聞こえてくる。僕の苦手なシチュエーションだ。しかしそんな僕などおかまいなしに鈴木は部室のドアを開けた。

「ちわーっす。大倉さんいますか？」

中にいた女子たちがいっせいに僕たちに視線を向ける。苦手だ。この感じ。女子の中の一人が席を立て近づいてきた。

「私だけど？なに？」

大倉さんは怪訝そうな顔をして僕たちのことを交互に眺めてきた。鈴木が口を開く。

「ちょっと話があるんだけど、ここじゃなんだから廊下で話せない？」

「いいけど……」

僕たちは廊下に出た。さっそく鈴木が大倉さんに訊く。

「五十嵐薫の噂、流してるの大倉さんって本当？」

大倉さんは眉根を寄せて僕たちを睨んできた。

「それがなに？」

「あの。どうしてかなあって思って。こいつ佐藤っていうんだけど。あの噂の佐藤くん。こいつが噂のおかげでちょっと困ってるんだよ。それでどうしてかなあって」

「ああ。君が佐藤くんなんだ。はじめて見た。地味だね」

その言葉に僕は傷ついた。大倉さんという人は残酷な女だ。

しかし一転して大倉さんは目を輝かせて僕のことを見てきた。

「ね、ね。あの噂って本当なの？」

「いや。違います」

大倉さんは大げさにうなだれた。

「そうなんだー。残念。ま、でもそりゃそうだよ。あの五十嵐薫が君みたいな子と付き合うわけないか。つり合いとれないもんね」

僕はまたも傷ついた。今日は一体何回落ち込めばいいのだろう。

「で？どうして、あんな噂流してるんだ？」

鈴木が大倉さんに訊いた。

「ああ、それはね。こんなのが私のところに届いたのよ」

と言うと、大倉さんはポケットから携帯を取り出し、なにか操作をして、僕たちに液晶画面を見せてきた。そこにはこう書かれていた。

《五十嵐薫は佐藤健太と付き合っている》

僕は哑然とした。いったい誰のいたずらだ。悪趣味にもほどがある。このメールのせいで僕は苦しんでいるんだ。鈴木が大倉さんに尋ねる。

「差出人は？」

「わかんない。匿名さん。なんだったら差出人のアドレス教えようか」

「ああ。頼む」

鈴木は大倉さんの携帯に送られてきたというメールの送り主のメアドをメモしているようだった。しかしなんだって。鈴木はメモを終えると腕を組んで唸った。

「しかし、疑問だなあ。なんだってこんなメールを送ってきたんだろう」

「気になるよねー」

大倉さんは好奇心満々といった表情だ。僕は自分のことで遊ばれている気がしてきて、暗い気分になっていた。

「五十嵐薫に対するいやがらせ？」

「五十嵐さん人気だからねえ。誰かから恨み買っててもおかしくないよ。それか弓道部に対する嫌がらせか。うちの弓道部って超強豪じゃん。それでもって五十嵐薫はそのエースでしょう」

「そうか、その線もあった」

「うん……あ！」

突然大倉さんがはっとした表情になった。なにか思いついたらしい。

「私、心当たりある」

「なんだなんだ？」

僕たちは大倉さんの言葉に耳を傾ける。大倉さんはひそひそ声で話してきた。

「バスケ部の木村省吾っているでしょ」

「ああ、あのイケメンか」

「そう。結構人気あるんだけど。あいつ、先月五十嵐さんに告って振られたらしいよ。それはもうこっぴどく。あいつってすごいプライド高いからさあ。それで恨んでるかもしれない」

「なるほど」

鈴木は腕を組んでうなずいた。大倉さんもうんうんと大きくうなずいている。

話がどんどん飛躍してきている。まずい。僕の頭の中の警戒信号が高らかに鳴り響いていた。僕は熱くなっている二人に割って入った。

「もういいだろ。そのくらいで。本当に木村くんが犯人なのかも分からないし。証拠は手に入ったことだし、ここらでおしまいにして」

鈴木と大倉さんが目を丸くして僕のことを見てきた。同時に見られて、僕は一瞬たじろいだ。

「えー。気になるー」

大倉さんが口を尖らせた。

「そうだよな。俺もすごい気になる」

鈴木が大倉さんに賛同した。

「私たち気が合うね」

「おう」

二人は不思議な連帯感を抱いているようだった。僕は当事者なのに一人取り残された気分になる。僕はあらためて大きなため息をついた。

「しかし、弓道部には黒い噂が絶えないねえ」

大倉さんが大きく伸びをしながらそう言った。

「黒い噂って？」

鈴木が興味津津といったふうで大倉さんに尋ねた。

「うん。弓道部にはさ。佐々木理子って子がいるんだけど、その子も誰かと付き合ってるっていう噂が流れた時期があって」

途端に鈴木が真顔になった。僕は少しおかしいな、と思った。

「それからその子学校に来てないんだよねえ。なんか今回の件と似てる気がする」

鈴木は反応を示さない。その代り、もみあげを手でしきりにいじっていた。

結局僕たちはバスケット部が活動している体育館に足を運ぶことになった。

体育館からはきゅつきゅつというバッシュの擦れる音や、ドリブルの音がリズムカルに聞こえてくる。

「おお、やってるなあ。まさに青春ってやつ。俺の部活にもこれくらいの活気があったらなあ」

鈴木が遠い目をしている。僕は心の中で「ざまあみろ」と思ったが、よくよく考えてみれば僕も入部するのだった。

大倉さんが誰かを探そうように体育館のなかを眺めまわした。

「あ、いたいた。あいつだよ」

大倉さんの指差した先には綺麗な顔立ちをした爽やかな男子が、他の部員たちと談笑していた。あれが木村くんだろう。

幸い顧問の先生もいないようなので、僕たちは遠慮することなく体育館の中に入っていった。木村くんたちがいる場所まで移動する。

木村くんたち数人は僕たちのことを「誰こいつら」といったふうな目つきで見えてきた。申し訳ない気分になる。しかし鈴木と大倉さんは少しも恐縮していない様子だった。大倉さんが口を開く。

「木村くん、ちょっといいかな」

「あ？なんだよ」

「五十嵐さんのこと」

大倉さんがそう言うと、木村くんは少し焦ったような素振りを見せた。やはり失恋の傷はいまだ癒えていないのだろうか。僕は木村くんに同情した。

「お前ら練習に戻れ」

木村くんが他の部員たちに言った。

すっかり日が落ちていた。体育館には西日が差しこんでいた。

「それで話ってなんだよ」

木村くんが大倉さんを睨むようにして言った。

「五十嵐さんが誰かさんと付き合ってるって言う噂知ってるでしょう？」

「ああ。あの噂な。まゆつばだと思うけど」

「それで、私に匿名のこんなメールが送られてきたんだけど」

大倉さんはさっきのメールを木村くんに見せた。

「これがどうしたんだよ」

木村くんが訝しげに大倉さんを見た。大倉さんはにやりと微笑むと木村くんの顔を覗き込んで言った。

「ずばりこのメールの送り主って木村くんでしょう」

「な……」

木村くんは絶句した。それはそうだろう。自分が犯人だと言われているようなものだ。

「どうなのー？噂では五十嵐さんにひどい扱いを受けたみたいじゃない。その恨みがあなたをこんな行動に駆り立てたのかしら」

「ち、ちがう。俺は絶対そんなことはしていない」

「本当かしら。随分しつこくまとわりついてたって話だけど。なんでも五十嵐さんにメールで告白したんですってね」

「……」

木村くんは青い顔をしている。

「あと、こんな話も聞いたことがあるわ。木村くん、隠れてたばこ吸ってるでしょう。いけないんだ。このことが担任にばれでもしたら、大好きなバスケができなくなっちゃうね」

木村くんは頭を抱えてうずくまってしまった。さすがにやりすぎだろう。僕も木村君みたいなイケメンがたばこを吸っているなんて驚いたが。

「さあ、白状しなさい。木村くん」

木村くんは大倉さんのことを見上げると泣きそうな目で訴えかけた。

「白状するもなにも、俺、本当になにもしてないって……」

「じゃ、五十嵐さんにメールで告白したっていうのは？」

それは今関係ないことなのではないか。しかし木村くんは観念して言った。

「それは本当」

「どうやって五十嵐さんのメアドゲットしたの？」

「それは友人知人に当たって……」

「卑怯な男ね」

木村くんはまたうなだれてしまった。大倉さんというのは本当に冷酷な人間だ。これまでのことを黙って聞いていた鈴木がはじめて口を開いた。

「なあ。五十嵐のメアドまだ持ってるだろ？それ教えてくれない？」

木村くんはうなだれたまま「なんで？」と言った。

「なんでも！たばこのことばらすよ！」

大倉さんが幾分声を大きくして木村くんを叱咤した。僕は先ほどから木村くんのことの不憫でならない。

「わかったよ。ほら」

木村くんは自分のポケットから携帯を取り出すと鈴木に手渡した。随分無防備だな、と思った。というか、練習中に携帯を持っていたのか。もしかしたら木村くんはあまり熱心に練習に取り組んでいないのかもしれない。これは少し意外。このこととたばこのことを知ったら、木村ファンはどう思うだろうか。

木村くんの携帯をいじっていた鈴木が、突然神妙な顔つきになった。

「どうした？」

「そうかもしれないと思っていたが、やっぱりな」

大倉さんが鈴木が持っている携帯の画面を覗き込んだ。続いて大倉さんも神妙な顔つきになる。

「どういうこと……？」

僕も鈴木が持っている携帯を覗き込んだ。

「なんだよ。五十嵐のメアドがどうかしたのか？」

鈴木がだまって、持っていたメモを手渡してきた。

そこには携帯の画面に表示されているアドレスと同じものが記載されていた。

僕たち三人は自販機でジュースを買い体育館そばの階段で話あった。

「つまり五十嵐本人がこのメールの送り主ってことだ」

鈴木が缶コーヒーをすすりながらそう言った。

「つまり、どゆこと？」

大倉さんは口を開けたまま、鈴木に尋ねた。ミルクセイキの缶はまだ開けられていない。

「俺もわからん。なんでまたわざわざ自分を窮地に陥れるようなことをしたのか」

「うーん」

僕も腕を組んで考える。が、なにも思い浮かばない。いったいどういう神経をしているんだ？五十嵐薫っていうやつは。僕は俄然、五十嵐の本心が気になりだした。

時計を見ると、時刻は五時を回ろうとしていた。

「ところで、私気になることが一つあるんだけど」

大倉さんが口を開いた。

「なんだ？」

「私のメアドを五十嵐さんに教えた人間のこと」

「ああ、そういえばそうか」

五十嵐薫が大倉さんに件のメールを送ったわけだから、大倉さんのメアドを五十嵐薫に教えた人間がいる。それは確かなことだった。

「で、私心あたりがあるんだけど。二人とも付き合ってくれない？」

僕たちは了承して、大倉さんの後に続いた。

僕たちは弓道場に来ていた。中を覗くと、部活はもう終わったらしく数人の部員が雑巾かけを行っていた。大倉さんがその中からある人物を見つけて声をかけた。

「椎名！」

呼ばれた女子生徒は姿勢がよく似合っていた。雑巾を絞りなおすと、彼女は僕たちのもとに小走りに駆けよってきた。

「なに？」

彼女は大倉さんのことを見つめると小首を傾げた。

「なに？じゃないわよ。あんた、私のメアド勝手に他の人に教えたでしょ。それも五十嵐薫に」

「う……」

椎名さんは小さく呻いた。これほどわかりやすい反応をする人間もめずらしい。ほぼ白状しているといっても過言ではない。

「なぜ、それを」

「ま、いろいろあってね。でも椎名、私に断りもなくメアドを教えるなんてよくないんじゃない？」

「ごめんなさい」

「わかればよろしい。で？どういうわけなの」

椎名さんは僕たちに事の次第を話した。

ある日、部活が終わって帰宅しようとしていた椎名さんのところへ五十嵐薫がこそこそと近寄って来たっそうだ。そして彼女は椎名さんに「大倉真由のメアド知ってるでしょ。教えてくれない？」と言ってきたそうだ。五十嵐薫の目にはなにか真剣な光が宿っていたという。それを見た椎名さんは五十嵐薫に黙って大倉さんのメアドを教えてしまったそうだ。

「椎名。あんたねえ」

大倉さんはおおきなため息をついた。彼女は呆れているようだった。

「ごめんなさい。でも、なんか薫、すごい真剣だったから。私も何も言えなくて」

そう言うと、椎名さんはうつむいてしまった。鈴木が口を開いた。

「なにか最近五十嵐の様子っておかしくなかった？」

「うん。あのね。佐々木理子って子がいるんだけど。彼女は薫と大の親友でさ。その理子が、いきなり学校にも部活にも出なくなっちゃったんだよ」

鈴木は黙った。

「それで？」

大倉さんが先を促した。

「それからかなあ。なんだか練習にも身が入らないみたいで。いっつも上の空っていうか。私たちも心配しまくってて。顧問の先生も心配して声をかけたんだけど、なんかその時薫がすごい剣幕で顧問の先生を睨んでさ。怖かったよ。なにがなにやらさっぱり」

「ふーん」

僕は考えた。どうもその佐々木理子って子が関係しているらしい。でも、それ以上のことはなにも分からない。

「これはもう、本人に直接聞いてみるしかないんじゃない？」

大倉さんが僕のことを見て言った。

「本人って」

「メアドなら、もう手に入れてるでしょ。それ使えば呼び出せるよ」

「そうか」

僕は鈴木からメモを貸してもらい、五十嵐薫の携帯にメールを送ることにした。しかし、どういう文面のメールを打てばいいだろう。僕が長考していると、大倉さんが僕から携帯を奪い取った。

「ええい。じれったいわね。ほら。これでいいでしょ」

大倉さんは勝手にいじると僕に携帯を渡してきた。僕は携帯の液晶画面を見た。

《俺は佐藤。犯人はお前だな。六時に駅前の公園に來い》

滅茶苦茶な文面だった。果たしてこれで五十嵐薫を呼び出せるのかどうか疑問だ。

「二人とも一緒に来てくれるよな？」

僕は鈴木と大倉さんの顔を交互に見た。しかし二人は難色を示した。

「ごめん。私これから塾あるんだよね」

大倉さんは言った。続いて鈴木が、

「俺も用事あるからパス」

と、言った。なんて薄情な奴らなんだ。ここまで来て、気にならないのか。

「すっごく気になるけど、ごめんね。明日話聞かせて」

大倉さんは胸の前で手を合わせて謝ってきた。

「じゃ、がんばれよな」

鈴木が我関せずと言った顔で言う。

結局僕たちは校門で解散することになった。

待ち合わせ(と言っても、こちらが勝手に呼びつけたわけだが)の公園に向かって歩いていた。

日が落ちて、あたりはすっかり暗くなっていた。その道すがら、僕は五十嵐薫のことについて考えていた。

五十嵐薫。弓道部のエース。学校のマドンナ。校内にファン多数。そんな彼女がわざわざ自分の不利になるような噂を自分で流した。なんのために？

椎名さんの話によると、佐々木理子が学校に来なくなってから、五十嵐の様子はおかしくなったという。それが今回の一件と関係しているような気がする。

弓道部には厳粛な恋愛禁止の掟があるらしい。それを破れば最悪退部。もしかして佐々木理子はその掟を破ったのではないか？そのせいで退部することになった。

だんだん考えがまとまってきた気がする。僕のことを困らせていたこの件の全貌が明らかになってきたような気がする。

公園についた。六時まであと五分。ちょうどいい時間に到着した。

外灯の光に虫が呼び寄せられている。

僕は少し緊張していた。これから学校一のマドンナと対面するかもしれないのだ。しかもあんなメールを送った本人と。自然と気持ちが引き締まる。

六時ちょうど。僕に向かって歩いてくる人影が現れた。

五十嵐薫は、パーカーにスニーカーといういでたちで現れた。なるほど、近くで見ると、彼女は間違いなく美少女だった。

「こんばんは」

五十嵐が素っ気なく僕に声をかけた。

僕は舌をなめ、くちびるをしめらせた。

「単刀直入な話になるけど、あの噂を流したのは君だね？」

「……」

風が五十嵐の肩まである黒髪を揺らしていた。五十嵐はしばらく沈黙を守ったが、僕のことを見据えると口を開いた

「ばれちゃったみたいね。どうして分かったの？」

彼女はそう言うと、僕に訊いてきた。

「内館くん知ってるだろ？彼に脅されて、僕に関する変な噂が立ってるって知った。それで友達に協力してもらって色々調べていくうちに、君が噂を流した張本人だという結論に達した」

「ふーん。たいした行動力と推理力ね」

彼女はどこか遠くを見るような素振りを見せた。

「どうしてあんなことを？」

自分なりの考えはまとまっていたが、あえて僕は訊いてみた。

「さあね」

五十嵐はそっぽを向いた。しらじらしい。五十嵐ってこんな高慢ちきな性格だったのか。僕は密かに気を落とした。顔は美人でも性格がアレでは、どうしようもない。五十嵐のこんな一面を見たら、ファンの連中も幻滅するに違いない。もっとも五十嵐のこういう部分に惹かれている人間もいるかもしれないが。

僕はなるべく気を強く持って、五十嵐に言った。

「佐々木理子だろ」

五十嵐の肩が微かに上下した。

「佐々木理子が退部したから君はこんな行動に出た」

五十嵐が僕のことをきつく睨んでくる。僕は少し動揺したが、なるべく表情に出ないようにした。

「佐々木理子は男と付き合っているという噂で退部した。恋愛禁止という掟を破ったからだ。君はそれをとても理不尽なことだと思った。だから自分に対しても同様の噂を流すことにした。そうすれば君も退部の処分が下されるかもしれない。しかし君は弓道部のエースだ。そんな君が退部になれば、弓道部も顧問も大変困る。だから結果として、恋愛禁止の掟を無くすことができるかもしれないと考えた。違うか？」

僕は一気に言った。我ながらよく噛まずに喋れたと思う。

相対する五十嵐は僕の目を見据えたまま佇んでいる。

強く凜とした姿。どこまでも自分の意思は曲げないという姿勢が垣間見えた。

強い風が吹き、木を揺らす。桜の花はもうすっかり落ちていた。

「でも君は間違えた。結局君も部を退くことになった」

「それは違う。ただの謹慎処分よ」

「そうだとすると、君はやりすぎた。こうして僕という人間を巻き込み。僕の友人を巻き込み、大倉さんも利用して、自分の思惑を遂行しようとした」

僕は五十嵐のことを睨んだ。自分で言ってるうちにだんだん怒りが増してきた。

そうだ。僕は被害者だ。どうしようもなく、巻き込まれた。

「それは……悪いと思ってる」

五十嵐は僕に言った。

「でも、それじゃ、私は泣き寝入りするしかなかったって言うの？あんな理不尽に屈しろって？」

五十嵐が一步前に前進してやってきた。

「たしかに恋愛禁止なんて時代錯誤だと思うよ」

「そうですね。そう思うでしょ」

「でも、決まりは決まりだ。そもそも、そんなこと部にいた君が一番よくわっていただろう？」

「それは……」

五十嵐は口ごもった。

「どんなに理不尽に思えても、そこに掟があるなら守らなくちゃいけない。それが嫌なら辞めればいい」

僕は少し言いすぎかもしれないと思ったが、思ったことを言葉にした。ここまではっきり自分の考えを口にしたことは、今までの人生の中ではじめてのことだったかもしれない。

五十嵐はうつむいたまま、何も話そうとしない。

「ちょっと何か飲みながら話さないか？」

僕は五十嵐にそう提案した。五十嵐は静かに一度頷いた。

自販機でコーヒーを二本買うと、僕はベンチに座っている五十嵐に一本手渡した。

「コーヒーでよかったか？」

「うん。苦手だけど」

「それはすまなかった」

僕は缶の口を開け、一口飲むと、五十嵐に言った。

「さっき君は謹慎処分になったって言ってたけど、佐々木理子は？」

「退部処分。そのあと、学校にも来てない」

「でもおかしくないか？ただの噂で退部とは。君が謹慎処分なのに対して、佐々木理子は退部。どうにも辻褄があわないと思うんだが」

「理子は噂のせいで退部したんじゃないってこと？」

「僕はそう思ってる。自分で辞めたんじゃないかな。それか……」

「そんなことない！だって理子は部の中でも一番熱心に練習に取り組んでたんだ。レギュラーとるために必死だったんだ。私は近くで見てきたから、それをよくわかってる」

「いくら親友でも知らないことはあるだろう。君は絶対佐々木理子の全部を知ってると言えるか？それと同じように君は佐々木理子に自分の全てを見せてると言えるか？」

「でも私は親友だから」

「親友だからこそ言えないことっていうのもあるだろ」

彼女は口をつぐんだ。おそらく高校生のカップルが僕たちの前を通り過ぎた。はたから見ると僕たちもカップルに見えなくもないのではないか。しかし、実際には違うのだ。

「連絡はしたのか？佐々木理子と」

「連絡、とれない。メール送っても返信来ないし、電話にも出ない」

「そうか……」

僕の頭に一つの考えが浮かんだ。でも、それは五十嵐にとって残酷な事実になるだろう。確信も持てない。今は言葉にするのはやめようと思った。

「今日はこのくらいにしておこう。明日、内館くんにはっきり僕と君は付き合っていないと言ってほしい。お願いできるね？」

「うん……」

僕と五十嵐は分かれた。

家に帰ってベッドに身を投げると、どっと疲れが出てきた。

今日は本当に色々なことがあった。めまぐるしい一日だった。

不精な僕がこれだけ稼働するなんて、とても珍しいことだった。

携帯が着信音を鳴らした。鈴木からだった。

〈どうだった？〉

僕はすばやくキーを押すと、鈴木に返信した。

《なんとかあった》

数分後、鈴木から返信が返ってきた。

〈なんとかあったってどういうことだよ〉

僕は少し思案して、こんなメールを返信した。

《会って話すよ。これからおまえの家に行く》

鈴木の家には何度も行っている。なので鈴木の家に行くということを経験して話しても「行ってらっしゃい」という返事が返ってくるだけだった。中学二年ともなれば家族の対応も素っ気なくなるものだ。僕はその方が楽なのでいいが、年頃の娘を持つ家族だったらこうはいかなかっただろう。

鈴木の家に向かいながら、僕は今日のことをあらためて反芻していた。今日は怒涛の展開を味わう一日だった。学校一の悪、内館くんとも初めて話したし、学校一のマドンナ、五十嵐薫とも初めて話した。ある意味有名人と交流を深めたわけであるから、なんとなく僕の気分が高揚しているのもうなずける。

鈴木の家に着いた。インターホンを押すと、鈴木の家のお母さんが出迎えてくれた。これもまたいつものことなので、僕は適当に「お邪魔します」と言うと、鈴木の家に入り込んだ。鈴木部屋は二階にある。部屋のドアをノックして入った。鈴木が僕のことを確認して言った。

「おう、来たか」

「うん」

鈴木はゲームをやっていた。

僕は適当なところに腰掛けると、しばらく鈴木がゲームをしているのを眺めていた。鈴木もまた黙ってゲームを続けていた。正直に言うとなにから話そうか僕は迷っていた。僕の当て推量が正しければ、親友は何かしらの問題を抱えているはずだ。いつまでも黙っていても仕方がないので僕から話すことにした。

「五十嵐と話したよ」

「うん。どうだった？」

「美人だった」

僕は率直な感想を口にした。実のところ五十嵐は僕の好みのタイプだった。今日直に話してみて思った。確かに学校一のマドンナというのもうなずける。僕はもしかして恋をしているのかもしれない。いや、ただ単に一度に色々なことがあったから心が動揺しているだけかもしれない。いわゆる吊り橋効果というやつだ。鈴木は笑って言った。

「おまえ、あれに惚れると厄介だぞ」

「ああ。そりゃそうだろうな。厄介だろうな」

「やめとけよ」

「厄介か。本当に厄介なのはお前じゃないのか？」

鈴木は黙ってゲームの画面に集中している。僕は無視された気分になって「聞いてんのか？」と少々語気を荒げて言ってしまった。

「聞いてるよ」

「お前、大丈夫なのか？」

「なにが」

「佐々木璃子の件」

鈴木はまた黙った。こいつは自分が不利な立場になると黙ってしまうくせがあるようだった。僕も話の核心に触れるのはためらわれた。しかし、ただ五十嵐の話をするためにここに来たのではない。僕は勇気を振り絞って二の句を告げた。

「たぶんだけど、妊娠してるんだよな。佐々木」

鈴木はただ黙っている。ゲームも中断した。しばらくして鈴木は口を開いた。

「五十嵐に聞いたのか？」

「いや、僕の推量だ」

「へえ、名探偵様ってわけだ」

鈴木の言葉にも語気にも棘が感じられた。

「なんでわかった？」

鈴木が訊いてきた。

「いや、なんとなくだけど。今日のお前のこと見てたらさ。佐々木のこと聞いてた時のお前の反応、やっぱりおかしかったし。それに佐々木が学校に来てないっていうのもおかしい。ただの退部処分ですぐ学校まで来なくなるっていうのはおかしい。それで、なんとなく……妊娠してるんじゃないかなって」

「じゃあ、親が知ってるってことも分かってるんだよな」

「うん」

それにしても今日僕のことをいつもと変わりなく迎え入れてくれた鈴木のお母さんの行動には疑問が残るところではある。しかし、全ての事柄において筋が通るというのも不自然なことなのかもしれない。

「いやあ。まさかこの俺がこんな失敗やらかすなんてな」

鈴木が乾いた笑いを見せた。僕はその軽薄な発言に眉をひそめなくなった。しかし、こいつの立場になってみれば、相当大変なことになっているのだ。僕の心の中には同情心と反発心が同居していた。

「俺、学校やめるわ」

「え……」

「だって女の子妊娠させといて、ただ漫然と学校似通っているわけにもいかないだろ」

「だからってどうするんだよ」

「知り合いのところで働かせてもらう」

鈴木は途端に大人の顔を見せた。いや、僕がそう感じただけのことなのだろう。

「そうか。そのことはあっちにも話てるの？」

「ああ。あっちの両親はちゃんと学校を卒業してからって言うてくれたけど。俺はそんなことできないから」

「ああ」

僕たちはしばらく無言でうつむいていた。部屋が静寂に包まれていた。沈黙を破ったのは鈴木という言葉だった。

「ゲームするか。これからあんまり会えなくなるし。今のうちに遊んでおこう」

僕は少々面食らったが、うなずいて同意を示した。

「ああ」

僕たちはしばらくゲームに熱中した。密かな連帯感が僕たちを包んでいた。

翌日、鈴木は学校に来なかった。

放課後、学校の屋上で五十嵐と内館くんと話した。

僕は昨日あったことを全部、内館くんと五十嵐に話した。

穏やかな風が吹いていたせいか、自然と話すことができた。

五十嵐も内館くんも黙って僕の話聞いていた。

彼らは全部聞き終わると、驚愕の真実を僕に告げてきた。

「実は俺たち付き合ってるんだよね」

そう言う内館くんの隣で五十嵐は顔を赤らめていた。

その瞬間、僕の小さな恋は爆ぜて散った。

「なんだ。つまり僕は壮大な痴話げんかに巻き込まれたってわけか」

彼らは笑った。冗談じゃない。だが。

その姿を、僕は不思議と美しいと思った。

「ごめんね。佐藤くん。私けじめつけるよ」

五十嵐はそう言った。つまり部活動をやめるということなのだろう。

部活動より、恋をとるってことか。いいさ。それもまた青春。

僕はなんだか一人取り残された気分になりながらも、不思議と一つ大人になった気分でした。

たぶんそれはただの勘違いなのだろうけど。

僕はそれでもいいと思った。

大人になる彼らのことを僕は眺めていた。

僕は一つのびをした。まったく、春というのは眠いだけの季節ではないのだな。

そんな僕をあざ笑うかのようにウグイスが「ホーホケキョ」と鳴いていた。